

福井県下の連合国軍捕虜について

木村 亮*

1. 県内の連合国軍捕虜の概要
2. Roger Mansell氏のウェブサイト
 - (1) 武生分所
 - (2) 敦賀分所
 - (3) 六呂師分所

『福井県史通史編 6 近現代二』が刊行されたのは1996（平成8）年3月であるが、それ以降のインターネットの普及により、往時に比べて資料環境は大きく変わった。もちろん、現在でも、資料が存在すると思われる図書館や資料館に出かけて行って、やみくもに目録を繰り、これと推量した文書群から現物を確認するというスタイルが主流であることは変わらない。だが、資料を所蔵する側が積極的にインターネットへの対応を進めることにより、福井の自宅で瞬時に資料を閲覧することが可能になった分野もある。たとえば、アジア歴史資料センターでは、国立公文書館、外務省外交史料館、および防衛省防衛研究所図書館所蔵の明治初期から太平洋戦争終結までのアジア関係資料がデジタル・アーカイブ化され、ネットでの閲覧に供されている（<http://www.jacar.go.jp/>）。軍事関係の資料が多いので、試みに、郷土史の題材としてよく扱われる1910（明治43）年4月の佐久間艇長の第六潜水艇遭難、および1924（大正13）年12月の河野村（現、南越前町）糠沖の特務艦関東遭難に関する文書を検索すると¹⁾、防衛研究所図書館所蔵の「明治四十三年公文備考 卷二十六ノ二 艦船九ノ二」約400ページ、および「大正十三年公文備考 卷三十三 艦船十三」約1,100ページの文書が、居ながらにして閲覧、印刷できる。

資料の閲覧にとどまらず、こうした資料を用いて作成されたウェブサイトも多数あり、グーグル検索によって引かかるこれらのウェブサイトは、資料やその紹介内容の信頼性については注意を要するものの、私たちの知識欲をいたく刺激するものである。この資料紹介では、そうした例の一つとして、太平洋戦争末期に福井県内に移送されてきた連合国軍捕虜について取り上げる。

1. 県内の連合国軍捕虜の概要

太平洋戦争の緒戦では日本軍は東南アジアや西太平洋で大勝利をおさめ、連合国軍のうち欧米人兵士約15万人が、当初現地の俘虜収容所²⁾に収容された。国内には1942（昭和17）年1月に設置された香川県善通寺俘虜収容所にガム、ウェーキ占領時のアメリカ兵などが収容されていたが、同年5月、政府は捕虜の一部を満州、朝鮮、そして国内に移して労役させることを決め、同年末に東京、大

* 福井大学教育地域科学部教授、福井県文書館記録資料アドバイザー

阪、福岡、函館に収容所本所を設置し、その下に次々と分所、分遣所、派遣所等を設け、工場や倉庫、鉱山・炭鉱等で捕虜たちを使役した。45年4月には、本土決戦に備えた軍管区の再編に対応して、新たに仙台、名古屋、広島（善通寺を吸収）に収容所本所を開設、また、空襲を受ける中で、京浜、阪神の収容所から内陸部や日本海側へ捕虜の移送が行われたが、福井県内の分所もこのときに開設されたものである³⁾。

県内の連合国軍捕虜（POW (Prisoner of War) の略称で呼ばれる）の存在は、上記の『福井県史』においては『福井県警察史第二巻』のわずかな記述⁴⁾によりその解放の局面に触れたに過ぎなかったが、現在では、ウェブページを通じてある程度の実態が容易に理解できるようになっている。連合国軍捕虜については、国内では、2002年に設立された「POW研究会」（内海愛子、福林徹共同代表）のウェブサイト（<http://www.powresearch.jp/>）が研究報告や活動報告として情報提供しているほか、「青森空襲を記録する会」がそのウェブサイト（<http://www10.ocn.ne.jp/~kuushuu/>）の中で米国国立公文書館所蔵の俘虜情報局によるデータを掲載しており、終戦時点における国内外の捕虜収容所と捕虜の数、国籍、階級等について日本側が把握していた数字がわかる⁵⁾。これにより福井県内の連合国軍捕虜のデータを示すと、次の表ようになる。

表 連合国軍捕虜（内地分）

昭和20年8月15日現在（俘虜情報局資料）（単位：人）

	将校	下士官・兵	計	民間人	合計
函館俘虜収容所	113	1,399	1,512	85	1,597
仙台俘虜収容所	109	3,440	3,549	257	3,806
東京俘虜収容所	440	4,979	5,419	631	6,050
名古屋俘虜収容所	98	3,182	3,280	58	3,338
管内計	432	3,640	4,072	184	4,256
アメリカ合衆国	384	1,488	1,872	42	1,914
イギリス	28	1,335	1,363	79	1,442
オーストラリア	13	358	371	1	372
オランダ	7	322	329	—	329
カナダ	—	131	131	—	131
インド	—	—	—	19	19
中華民国	—	—	—	26	26
ノルウェー	—	—	—	9	9
南アフリカ	—	—	—	2	2
アイルランド	—	3	3	—	3
ギリシャ	—	—	—	5	5
マルタ	—	—	—	1	1
ニュージーランド	—	3	3	—	3
うち第五分所（福井県敦賀市）	3	396	399	—	399
アメリカ合衆国	3	377	380	—	380
オランダ	—	19	19	—	19
うち第七分所（福井県南条郡武生町）	1	197	198	—	198
アメリカ合衆国	—	33	33	—	33
オーストラリア	1	164	165	—	165
うち第十一分所（福井県大野郡阪谷村）	328	19	347	14	361
アメリカ合衆国	328	9	337	14	351
イギリス	—	5	5	—	5
オランダ	—	5	5	—	5
広島俘虜収容所	108	2,834	2,942	18	2,960
福岡俘虜収容所	234	9,595	9,829	582	10,411
内地計	2,630	33,933	36,563	2,027	38,590

注 青森空襲を記録する会Webページより作成（原資料は、National Archives & Records Administration, RG331. BOX#966. Folder#(5).Area Case Files:To-0, Vol.3.General Information）

表にみられるように、県内には大阪俘虜収容所の分所が3ヵ所あったが、いずれも戦争末期に開設されたものである。最初に開設されたのは敦賀分所で、45年4月23日、大阪俘虜収容所第20分所（8月に第5分所と改称）として敦賀市桜町165に開設され、下士官・兵を中心とする捕虜たちは敦賀港海陸運送株式会社で荷役作業に従事した。さらに5月18日に武生分所と六呂師分所が開設された。武生分所は第22分所（同第7分所と改称）として南条郡武生町北府2丁目に開設、信越化学武生工場などで労役に従事した。また六呂師分所は第26分所（同第11分所と改称）として大野郡阪谷村南六呂師に開設、前2者と異なり将校を中心とする捕虜で、鯖江連隊六呂師演習場周辺を開墾し、自活労務に従事した⁶⁾。

2. Roger Mansell氏のウェブサイト

これらの収容所の具体的な様相を知るには、国内のサイトでは難しい。しかし、アメリカの側には、捕われた立場から、米国国立公文書館所蔵資料だけでなく、収容所の実態や元捕虜たちの証言、彼らの残した回顧録、写真など、膨大な資料を掲載した民間人のサイトがいくつかあり、日本の研究もこれらのサイトを参照していることが多い。その中で、アジア全域の収容所と収容された捕虜について克明に調べ上げ、現在もページの更新が続けられているサイトに、カリフォルニア州在住のロジャー・マンセル氏によって運営される“Center for Research : Allied POWS Under the Japanese” (<http://www.mansell.com/pow-index.html>) がある。ここでは、このマンセル氏のサイトから県内3ヵ所の収容所の様子を眺めてみよう。

各地の収容所のページに行くためには、膨大な記事とリンク先が示されたメインページから、最初の画面中央の「Camp List」をクリックし、一覧表の中から「[Rokuroshi](#)」「[takebu #7-B\[TAKEFU\]](#)」「[Tsuruga Branch Camp Osaka #5](#)」をクリックするとよい。収容所によって情報量が異なるのでページの構成は同じではないが、収容所の所在地、タイムライン、収容者名簿、日本人スタッフ名簿、強制労働の状況などの項目が掲載されることが多い。収容者名簿をたどると、そのうちの何人かのインタビューや回顧録などに行き当たる。また、収容所の写真がある場合にはこれが掲載されるほか、BC級戦犯裁判の被告が出た収容所では、裁判の際の元捕虜の宣誓供述書が掲載される場合もある。

(1) 武生分所

まず、武生分所については情報が少なく、大阪の第三派遣所（淀川製鋼所で就役）と、大正分所（日立造船築港造船所などで就役）のアメリカ兵およびオーストラリア兵200名が収容され、後に2名が転出したことぐらいしかわからない。収容者名簿もアメリカ兵27名分しか判明していない。名簿の中には、グアム、ウェーキといった緒戦で捕虜となった者も含まれている⁷⁾。

(2) 敦賀分所

敦賀分所には、4月25日に大阪府下多奈川分所に収容され飛島組作業所で川崎重工業の造船所建設に従事していた下士官・兵のうちアメリカ人180名、オランダ人20名が入所、さらに5月20日に梅田分所に収容され日本通運大阪支店で各駅の荷役作業をしていたアメリカ人下士官・兵のうち200名が入所した（後に1名が仙台に移送された）。将校が3名いたが、これはキャンプ・ドクターである。捕虜の多くはフィリピン戦におけるバターンまたはコレヒドールでの投降者で、バターンでの投降者

はいわゆる「死の行進」を経験している⁸⁾。以下は、掲載されたインタビューや証言などからわかる敦賀分所および捕虜たちの様子である⁹⁾。

彼らは42年末に国内に移送され、上の2ヵ所の分所で長期間にわたり過酷な労役に従事したことから、死者もかなり出ていた。分所勤務の日本兵や軍属からの懲罰も受けており、日本軍の武器・弾薬の搬送を拒否したこともあって収容所の雰囲気は悪化していた。敦賀分所では、以前の分所で監視を担当していた日本兵・軍属の一部が引続き監視に当っており、以前のこうした険悪な雰囲気が継続されていたとみられ、そのこともあってか、この分所の日本兵・軍属からは、後に横浜裁判においてBC級戦犯として有期判決を受けた者が何人か出ている。

捕虜たちは、港で豆や穀物の袋を倉庫から貨車に積み込んだり、クレーンを操作して貨車から鉄材を降ろしたり、また触雷して港内に投錨している船舶の荷を降ろしたこともあった。ここでも大阪市内の収容所におけると同様に、武器・弾薬の搬送を拒否し制裁を受けている。他方では、乏しい配給食糧を補うために、荷役作業の最中に食糧を掠め取ったとの証言もある。麻袋に穴を開け、中の大豆をズボンのポケットに落とし入れる。ポケットにも穴を開けて、ズボンの裾に大豆がたまる仕掛けになっており、監視の目をくぐって宿舎に戻ることができた。ただし、抜き打ちの査察で隠匿食糧がみつかり、徹底した制裁を受けた。

捕虜たちの証言には空襲のことも出てくる。7月12日の敦賀空襲で桜町の分所が被災し、焼失した。空襲が始まって暫くの間、捕虜たちは寝台から動くことを許されなかったが、火が各所で燃え広がると、建物の外に出され、焼夷弾が落ちてくる中で建物脇の食糧庫から食糧を搬出する作業を命じられた。1名が右手の指を失ったほかは若干名が火傷を負っただけで人的被害は小さかったという。その後ドック内の倉庫に宿舎を仮移転したが、ここは土間で雨漏りもひどく、便所もない状況で、多くの病人が出た。食糧の配給も以前の半分の量に減り、麦粥だけとなった。

その後7月末にアメリカ海軍の艦上戦闘機ヘルキャットの攻撃により、この建物も破壊されたため、南津内地籍の東洋紡績工場に隣接する建物に宿舎は移転した。しかし、ここも「豚小屋」に等しいものだった。長さ130フィート、幅40フィートの小屋の内部には寝台が3～4列並び、屋根は皮葺きで、便所は板の間に浅い溝が20フィートほど続くだけ、飲み水も旧宿舎から運搬した。2名が肺病に罹ったとされている。8月8日に東洋紡績工場への爆弾投下（原子爆弾の模擬投下）の記載もあり、このときには捕虜たちの宿舎にも破片が降りかかった。

捕虜たちが終戦を感じたのは、ある日作業の最中に、監視兵が突然に「今日は暑すぎるので仕事にならない」といって作業をやめさせた時だったという。翌朝、今日の作業はないと言われた後、煙草と足袋、服が配給された。捕虜の中には市内に出かけて足袋や服を酒に換えた者もあった。戦争が終ったことを知ると、捕虜たちは、建物の屋根に大きな文字で「POW」と描いた。米軍機はこれをめがけて食糧や薬品、衣料を投下した。中には、Hersheyのチョコレート・バーを食べ過ぎて気分が悪くなった者もいたそうである。彼らは、後出の六呂師の収容者と同様、9月9日に汽車で横浜へ向かった。

(3) 六呂師分所

六呂師分所については、米軍将校が中心であるためか、写真やスケッチ、元捕虜の証言も豊富に掲



写真 1 六呂師分所退去のために荷造りする元捕虜たち



写真 2 トラックに乗り込み出発を待つ

載されている¹⁰⁾。同分所には5月20日、大阪の津守分所、梅田分所から30名（イギリス人5名、オランダ人5名、ウェーキで捕えられたアメリカ民間人11名、同陸海軍兵9名）が到着し、収容所の建設作業に従事した。そして6月23日の昼に善通寺収容所を出発した将校335名が、高松、岡山、梅田を経て翌日の夜に福井に到着、トロリー・カー（京福電鉄か）に乗り換えて1時間、下車後約10キロの山道を徒歩で進み、深夜3時に現地に到着した。建物は、日本軍の夏の演習用の宿舎と倉庫があてがわれたが、狭く、暗く、汚く、蚤や虱だらけであった。景色だけは素晴らしかったが、建物内には火の気がなく、おまけに7月4日には周囲の山が冠雪した。このような辺鄙なところに将校が集められたのは、おそらく本土決戦に備えて士官クラスを隔離することに日本側のねらいがあったものと思われる。

捕虜たちの主な仕事は、石ころだらけの土地を掘り起こし、そこに芋を植えることだった。善通寺収容所での彼らへの待遇は、先に紹介した大阪の各分所に比べれば悪いものではなかったが、ここ六呂師にやってきて、作業の辛さと食糧事情の悪化を経験するにつれて、彼らは肉体的にも精神的にもどんどん消耗していったという。32名を数える六呂師の日本人監視スタッフはビジネスライクだが真面目で、捕虜との間に大きな摩擦はなかったとされるが、それでも8月5日には2名の脱走者が出た。翌日彼らは学童の通報により捕捉され、大阪へ移送された。ただ、脱走兵に対する懲罰や処刑の様子を数多く見てきた彼らの目には、日本側の脱走兵への扱いに変化が生じていると映ったようである。

このように脱走者が出たことと、おそらく8月上旬の新型爆弾の情報が日本側にも伝わってきたことも加わって、日本人スタッフとの間が険悪になりつつあった8月17日、所長の部屋に一本の電話がかかった。所長はしばらく野外作業はないと言い残し、出かけていった。22日に戻ってきた彼は、終戦を報告し、屋根に「POW」の大きなサインを描くよう指示した。これを聞いた元捕虜たちは、直ちにひそかに持ち込んでいたアメリカ国旗の掲揚式を行った。これに先立つ8月4日にJames Irie Mallett少尉が肺結核で死去していたが、六呂師分所唯一の死者である彼の名にちなんで彼らはこの分所を「マレット・キャンプ」と呼んだ。

25日に4名の将校が京都へ向けてトラックで出立し¹¹⁾、9月2日の夜明け前に敦賀分所で入手した食糧を積んで帰り、あわせて食糧・衣服のパラシュート投下を予告した。果たして同日朝8時、5機のB29がやって来た。投下されたコンテナが重かったので、台所やバラックの屋根が破壊され、折れた腕木で怪我をした者もあった。元捕虜たちは昼過ぎまでむさぼり食い、その後残りを分配した。コンテナの中にはDDT粉末の缶もあった。彼らはDDTについてあまり知識がなかったが、その効果は驚くほどだったと書き残している。六呂師を離れるまでの間、彼らは近隣の村や大野町内にも出かけ、糧食を交換したり散髪屋に入ったりもしている。

正式に日本の降伏が伝えられたのは9月4日であったが、国際赤十字や進駐軍との接触のために関西へ出かけていたWilliam A. Orr少佐が7日に帰還し、翌8日に出立のためのトラックが来ることを伝えた。情報通りに、8日に第一機甲師団の兵士と医師、看護婦、従軍カメラマン、通訳からなる護送隊が日本人の運転するトラックとともに到着した。翌9日朝、元捕虜たちはこのトラックに分乗し、大野駅からトロリー・カーに乗り換えた。福井駅で日本側から昼食が提供され、赤十字の女性がお茶

を給仕した。彼らは、出発を待つ間、福井駅周辺の焼け跡を歩き回ったが、焼け残った建物から廃棄された日本軍の銃や刀を持ち出した。また、歯科のキャビネットからは空襲の犠牲者から誰かが集めたと思われる金歯やブリッジを見つけて入手した。警官を脅して武器を手に入れた者もあった¹²⁾。上級将校は集めた武器を返還するよう命じたが、横浜への列車に乗った後、当の彼ら自身が日本刀と銃を携帯していることが判明した。彼らは盗んだものではないと言い張ったが、誰も信じなかったという。

以上、マンセル氏のサイトのデータ、およびそこに掲載されているいくつかの記事や証言をつなぎ合わせる形で各収容所の状況を紹介した。1日ばかりで資料をダウンロードし、3日間ぐらい辞書を片手に格闘するところの程度のことわかる。ここに出てくる証言は、苦汁を味わった勝者の回顧録であるという点を割り引いて考える必要があるものの、これほど具体的な記録が今まで国内で得られなかったことは確かである。この資料紹介を読んで興味を覚えた諸氏には、ぜひ一度アクセスして欲しいサイトである。ただし、掲載されている写真などを他に転載しようとする際には、著作権に注意されることを付け加えておく。

注

- 1) メインページ左側にある「簡易検索（キーワード検索）」に、「第六潜水艇」、あるいは「特務艦関東」を入力し、検索ボタンをクリックすると、検索結果一覧が現れる。「画像閲覧」のマークが付された資料は、このマークをクリックするとオンラインで文書を閲覧、印刷できる。
- 2) 当時、日本ではいわゆる捕虜を「俘虜」と呼び、収容所も「俘虜収容所」と呼称した。本稿では、当時の呼称を紹介するとき以外は、「捕虜」、「捕虜収容所」の言葉を使用している。
- 3) POW研究会ウェブサイト（後出）掲載の
福林徹「日本国内の捕虜収容所」<http://www.powresearch.jp/jp/archive/camplist/index.html>を参照されたい。
- 4) 『福井県警察史第二巻』（福井県警察史編さん委員会編、1990年）390－92頁。現時点までに発行された福井県内の行政史、自治体史で連合国軍捕虜に触れたものは、このわずかな叙述と、これに新聞記事を加えた『福井県史』のみであり、しかも解放の局面に限られた内容となっている。なお、『警察史』では、終戦時に福井県下の捕虜収容所で強制労働に服していた捕虜の数を、「福井県警察資料」により「敦賀市に三百八十二人、武生町（現武生市）に二百十人、大野郡阪谷村（現大野市）六呂師に約八十人」とし、『福井県史』もこれを引用している。しかし、本稿の表で示した、より信頼性の高いデータを見ると、特に六呂師の数字に大きな誤りがある。
- 5) メインページのリンク先を、「仙台俘虜収容所第十一分所」→「帝国内地・外地俘虜収容所明細」→「大阪俘虜収容所」とたどると、福井県内の捕虜収容所の捕虜の数、国籍等がわかる。
- 6) 前掲、福林「日本国内の捕虜収容所」、および笹本妙子氏作成の「国内の捕虜収容所～所在地・開閉設経緯～」<http://home.comcast.net/~winjerd/POWCmpsJ.txt>（これは、Wes Injerd氏のサイト、“Prisoner of War Camp #1 Fukuoka, Japan”の2 頁目に掲載されたリンク先「Complete listing of POW camps in Japan」からみることがができる）による。また「青森空襲を記録する会」のサイトから、「仙台俘虜収容所第十一分所」→「内地俘虜収容所明細一覧表」→「大阪俘虜収容所」<http://www10.ocn.ne.jp/~kuushuu/osaka.html>の一覧表も参考になる。
- 7) http://www.mansell.com/pow_resources/camplists/osaka/takefu_os7/takefu_yanks.html
- 8) 日本国内の連合国軍捕虜はフィリピンで投降した者が多くを占めるため、このサイトで紹介されている元捕虜の回顧録やインタビューには、「バターン死の行進」に触れたものが数多く散見される。
福井県内の3 収容所の関係者だけでも、敦賀の収容者ではLeo H. Dorseyの記事、六呂師の収容者ではKary Cromus Emerson大尉（階級は当時のもの、以下同じ）の回顧録“GUEST OF THE EMPEROR”1977、Henry Mortimer Knox少尉の記事、Horace Buford Patterson, Jr.少尉の日記（ノースカロライナ大学図書館所収）の要約文、Michael M. Ushakoff少佐の証言がある。とくにエマーソン大尉の回顧録は、「死の行進」の章に13頁を割いている。
- 9) 8) のほか、Morgan French、Emerson M. McCarter、Wright P. Shill, Jr.、William David Sparrow, Jr.、Jesse L. Stewart、Robert T. Rohmerの各氏の記事および証言による。
- 10) 8) のほか、H. J. Van Peenan軍医、Charles S. Todd大尉の記事・証言、および、このページで紹介されているDonald T. Giles, Jr.海軍中佐の回顧録“Captive of the Rising Sun”Naval Institute Press, 1994による。
- 11) このあたりの人数や日付については、記事に若干の食い違いがみられる。ここでは主としてエマーソン大尉、およびジャイルズ中佐の回顧録に依拠している。
- 12) このエピソードは、『福井県警察史第二巻』391－92頁にも似たような内容を語る資料が引用されているので、事実であろうと思われる。以下は引用された文章である。
「…前略…到着した捕りよは五十余名で将校が多かった。到着すると日本赤十字社の湯茶の接待を受け、三々五々市内散歩ということだろう、空襲後バラック建の多い市内へ出かけていった。そして焼残りの人絹会館とか福井銀行・市役所・公会堂などの大きな建物の中をチュウインガムを噛みながら、毛布を肩から覆って徘徊していた。矢張り捕りよらしい寂しげな姿と思はれた。このようにして格別暴れるとか婦女子への暴行もなく平穏だったが、福井駅前大通りで制服の日本将校を発見して軍刀を取上げてしまったという情報も入り、又吉村署長さんがピストルを突きつけられ腰の軍刀を（その頃警察幹部は軍刀をさげていた）取られ、丸腰で帰って来られたのには一寸驚いたが、その当時の情勢では笑えぬナンセンスとしてこの程度は仕方がない。兎も角三時間の不安な時間も何時しか過ぎて、一同無事引揚げて行って呉れたことは何よりでお互皆ホッとした。」（『おもいで』昭和三十年、福井県旭光会発行）